「わくワークらいふシステム」の取り組み

自分らしく主体的に生きるためのチカラ（生活に必要な力と働く力）の育成に向けて

兵庫県立赤穂特別支援学校
校 長　　内 海　貴 美 子

はじめに

我が国は、2007 年に「障害者権利条約」に署名し、2014 年に批准した。批准までの間に国内では、障害者基本法の改正、障害者総合支援法の成立、障害者差別解消法の成立および障害者雇用促進法の改正など、様々な法制度整備が行われてきた。2021 年 3 月には障害者の法定雇用率が引き上げられ、従業員が 43.5 人以上の民間企業では 2.3%となった。障害のある方が希望や能力、適性を十分に活かし、障害の特性などに応じて活躍することが普通の社会、障害のある方と共に働くことが当たり前の社会の実現が少しずつ進んできている。こうした中、特別支援学校でも一人一人の実態に応じて、共生社会で主体的に生きる力を育むキャリア教育の取り組みが行われている。しかし、全国の知的障害特別支援学校高等部卒業者の進路先を見ると、企業就職者の割合は 34.0%であるが、兵庫県の企業就職者の割合は 23.4%と全国平均よりも低く、生徒の就労に向けたキャリア教育や進路指導の更なる推進が求められている。

表 1 H30 年度 知的障害特別支援学校高等部卒業生の進路状況

区分	卒業者(人)	進学者(人)	教育訓練機関等入学者(人)	就職者(人)	社会福祉施設等入所・通所者(人)	その他(人)
全国 知的障害	18,668	76	241	6,338	11,267	746
		0.4%	1.3%	34.0%	60.4%	4.0%
兵庫県 知的障害	843	3	25	197	594	24
		0.3%	3.0%	23.4%	70.5%	2.8%

赤穂特別支援学校の進路指導の現状と課題

本校は、兵庫県赤穂市の西に位置し、南に瀬戸内海、北西に黒鉄山（430.6 メートル）が望める自然豊かな環境にある。2021 年度の児童生徒数は、106 名（小学部 38 名・中学部 23 名・高等部 45 名）で小規模な特別支援学校である。赤穂市は塩の町として知られ、かつて広大な塩田があった跡地は企業用地などとして利用され、多くの企業が進出している。それらの企業では、体験実習をさせて頂いたり、生徒の就職先となったりしているところも多数ある。

進路指導部長西田は、職務に就いた 2019 年 4 月、まず始めに「本校の生徒や保護者、卒業生の現状やニーズの調査」「企業や福祉事業所の現状やニーズの調査」「国内の特別支援学校の進路指導体制の調査」を開始した。それら 3 つの調査を通じて、本校の進路指導の課題を明らかにし、よりよい進路指導システムを作り上げようと考えたためである。

そのうち 2 つの調査（①生徒や保護者、卒業生を対象、②企業や福祉事業所の担当者対象）結果から以下のようなことが分かった。

【本校の生徒や保護者、卒業生の現状やニーズの調査結果】

- 進路選択に迷う事例や卒業後しばらくして離職したり、施設に通いにくくなったりする事例
- 実習で初めて課題に気づいたという意見
- 生活スキルの獲得の重要性に高等部になって気づいたという意見
- もっと進路の情報をほしい・先生と相談したいという意見など

【企業や福祉事業所の現状やニーズの調査結果】

- 早期に実習をして意欲的な生徒を採用したいという企業の事例
- 放課後等デイサービスから就労継続支援Ｂ型の事業、生活介護の事業まで運営されている福祉事業所では、保護者や生徒本人と早期につながりたいという意見
- 入所施設の多くは満床状態が続いている現状や、地域に生活介護の事業所が少ない現状など

また、国内の特別支援学校の進路指導体制の調査では、ホームページ上に「進路の手引き」や「進路のしおり」などを公開している約 30 校を調べた。その結果、よい実践（就職率が高い、就職後の定着率が高い、学校評価における進路指導部の評価が高いなど）を行っている学校は学校全体でキャリア教育に取り組んでいること、実習を多く行い、生徒の働く経験・体験を増やす取り組みをしている事例、市町や地域の企業と連携して働く体験を行っている事例、作業学習などを系統

的・計画的に行っている事例、などが見られた。

これらの現状からみえた本校の課題を整理すると、①企業や施設などでの実習や見学会が少なく、生徒の体験や経験不足がみられること、②進路選択の機会が少なく、職場や福祉事業所とのミスマッチが生じやすくなっていたこと、③進路情報の提供や進路相談の機会の少なさから、保護者の中に子供の将来を不安に思う方がいること、④学校全体でキャリア教育が推進できていないことなどがあげられた。そのため、児童生徒や保護者のニーズ、施設や企業のニーズ、時代の流れなどに合わせて、新たなシステムで進路指導を行う計画を立案し、2019 年度の 2 学期から開始した。

その名も「わくワークらいふシステム」である。

わくワークらいふシステム

「わく ワークらいふシステム」とは、高等部卒業後、自分らしく継続的に働いたり、自分らしく生活したり、自分らしく生きることができるように、「一人一人の実態に応じた進路指導」を行うものである。本校の全ての児童生徒が卒業後、「わくわくする生活」や「わくわくする仕事」につながるように、保護者と共に支援していく進路指導システムである。「わくワークらいふシステム」では、小学部、中学部、高等部の 12 年間を見据えたキャリア教育を行う中で、「生活に必要な力」と「働く力」を身につけることに重きを置いている。普段の授業や学校生活、家庭生活の中でそれらの力を身につけ、高めていこうと学校全体で取り組んでいる。

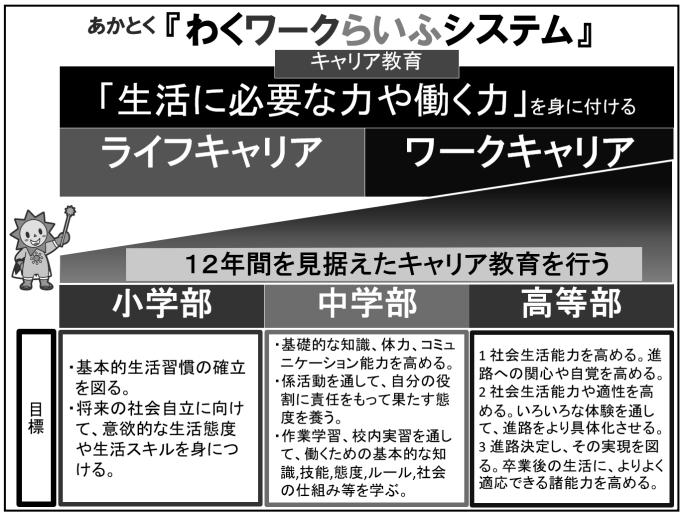

図 1. わくワークらいふシステムの体系

新たな取り組みについて

これまでの本校の進路指導（2019 年以前）との大きな違いは、進路選択を充実させる取り組みを強化したことと、学校全体でキャリア教育を推進したことである。具体的には、体験実習（高等部 1 年時から 2 回実施可能）や見学会（新型コロナウイルスの影響で個別に実施）の拡充、個別の進路相談会（各学期末や実習前後、希望に応じて実施）を増やし、進路説明会や進路だより、学校ホームページ、校舎内掲示などを通じて情報提供や情報共有をきめ細かく行い、児童生徒や保護者の希望を尊重した進路指導を実施する中で、児童生徒の実態に応じた支援を行っている。つまり、進路選択の幅を広げ、「自分に合う進路決定」につなげることがねらいである。

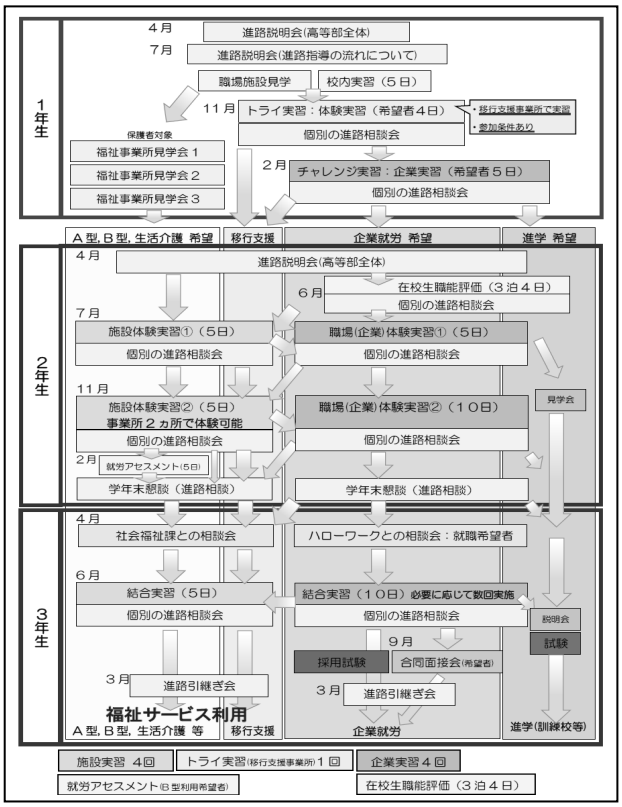

図 2. 高等部のわくワークらいふシステムの計画

特に高等部生徒の進路希望調査では、本人や保護者の希望を書面だけでなく、面談や懇談で細かく聞き取り、どのような職種や仕事内容で働きたいのかなどを把握した後に、本人の希望と実態に合う会社や福祉事業所などで実習ができるように進路開拓を実施している。「本人や保護者の希望を尊重した進路指導」と「児童生徒の実態に応じた支援」は、本校が最も大切にしている取り組みである。このように進路開拓した会社や福祉事業所などで実習を行うと、希望の会社や事業所で実習が出来るため、生徒のモチベーションも高く、意欲的に実習に取り組むことができ、実習先からの実習評価も高い結果となっている。また、実習後の振り

返りを丁寧に行い、よかったところ、頑張ったところをしっかり称賛し、実習でみえた課題について、普段の授業から取り組んでいくようにしている。

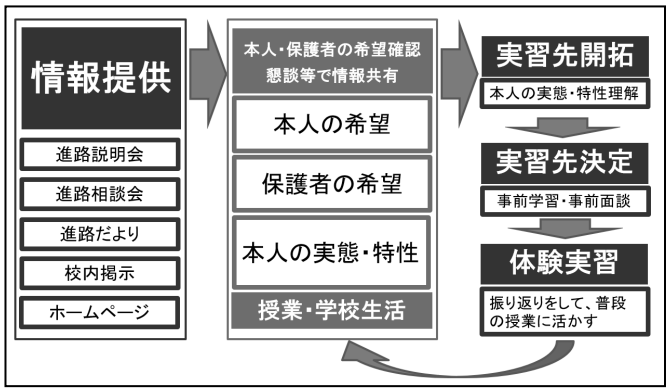

図 3. 高等部の体験実習実施までの流れ

自己有用感を高める取り組み

上記の新たな取り組み以外にも、学校全体で「先言後礼（挨拶をした後に礼をする）」を行う取り組みを実施したり、高等部の生徒がビルメンテナンス検定で学んだ技能を、中学部の生徒に指導する取り組みや、卒業生の体験談を聞く会、サテライト授業などの取り組みも実施したりしている。

サテライト授業とは、日々の学習で学んだ内容を校外の企業や公共施設での実践的な活動に展開し、他者から認められたり、ほめられたりすることにより、自己有用感を高めて、働くための意欲を育成していくことを目的として行われ、生徒たちに大変好評である。

図 4. サテライト授業:学んだ技能を生かし、地域の公共機関で清掃活動を実施

学校全体でキャリア教育を推進

本校での「わくワークらいふシステム」推進には、全ての先生方の協力が不可欠である。そのため、各学部の学部会に参加し、本校の進路指導の現状と障害者の就労に関する社会情勢、わくワークらいふシステムの説明、キャリアの発達段階表などについて話し、学校全体で児童生徒の「生活に必要な力」「働く力」を身につける支援をお願いしている。説明会や研修会では、本校の卒業生の具体的な事例をお話している。

その生徒は本校に小学部1年時から在籍し、知的障害と自閉スペクトラム症を併せ持つ重度障害の生徒で、近隣の児童養護施設から通っていた。言葉を話すことはできないが、要求するときはお願いのサインをしたり、先生の手を引っ張って物をとってほしいなどを伝えたりすることができた。保護者は、高等部入学時から卒業後の進路を「入所施設希望」としていたが、入所施設は高齢化と満床状態が続き、卒業時に希望の施設に空きがあるかは不透明な状況であった。そのような中、進路開拓によって高等部3年時に入所施設2カ所で体験実習を行うことができた。その際、その生徒は普段からスプーンを使って自分で食べる練習を繰り返し行っており、実習先でも大皿にいれた食べ物を自分で食べることができた。そのことを大変評価され、卒業後の進路先を決めることができた。小学部段階から、食事や排せつなどの生活に必要な力をコツコツと積み上げてきたからこそ、卒業後の進路につながったのである。小学部や中学部の先生方の日々の支援に感謝の気持ちを伝え、それらの支援が卒業時の進路につながっていくことを話し、学校全体で児童生徒によりよい支援をしていこうと呼びかけている。

図 5. 研修会の様子

現れ始めた成果

こうした取り組みを重ねていく中で、着実に進路実現として成果が出始めている。

2020年度は本校高等部卒業生16名のうち、7名が企業就職することができた。本校の卒業生の就職率は44%となった。7名とも希望の会社に就職することができ、うち4名はフルタイムで働いている。

本校では、高等部2年時からコース別にクラスを分けるため、この7名は、就職を目指すクラスで2年間仲間と切磋琢磨してきた。担任は2年間継続してクラスを受け持ち、「できることを1つでも2つでも増やそう」と生徒たちにいつもポジティブな声かけをし、

普段の授業や日々の生活の中で力をつけていく支援に徹していた。特に力を入れていたのが、「書く力」と「話す力」、「体力」の強化である。書く力では、毎日の日記に加え、日々のニュースチェック（気になった新聞記事をメモ帳に書き写してくる課題と各生徒がニュースチェックを口頭で発表したものをメモする課題）、実習前後に実習目標や実習結果の掲示物作成、お礼状や季節の手紙、塗り絵やイラスト作成など、とにかく書く習慣・メモする習慣をつける取り組みを継続的に行った。話す力では、朝の会や終わりの会で発表する機会を頻繁に設けたり、ニュースチェックを読み上げること、会話に答える練習、報告・連絡・相談する練習、面接練習などを行ったりする中で、普段の生活から自分から話すことができるように取り組んだ。体力では、部活動や体育だけでなく、自分の能力に合った個別メニューで腹筋や背筋、腕立て、縄跳び、スクワット、バービージャンプ、バランスボールなどを毎日行ったり、クラス全員で早朝登山をしたりする中で、持久力やバランス感覚、体力などの強化を行った。

		6/2	6/3	6/4	6/5	6/8
A	縄跳び　前1段・後ろ1段　各100	○	○	○	○	○
	腹筋　腕立　50×3	◎	◎	◎	◎	◎
	バービージャンプ30秒×3	○	○	○	○	○
B	ブランクアップダウン・ディップス各20		○	○	○	○
	腕立て・手幅の狭い腕立て・左右腕立て各10	休	○	○	○	○
	バタフライ・平泳ぎ・クロール各20×2のうち1		○	○	○	○
C	縄跳び　前1段・後ろ1段・かけ足　各100	○	◎	◎	○	○
	バランスボール　正座　3分	○	○	○	○	○
	腹筋　背筋　腕立て　20×3	◎	◎	◎	○	○

図 6. 「体力」強化の取り組み

7 名全員が「就職」という目標に向かって、担任と共に努力し、励まし、認め合い、支え合ってきた結果、全員就職することができた。

また、2019 年度と 2020 年度の 2 年続けて小学部 1 年生から本校に在籍していた生徒が企業就労することができた。地域外の高等特別支援学校などに行かずとも、本校のカリキュラムや進路指導システムの中で 12 年間を通して「生活に必要な力」と「働く力」を身につけ、企業就職できたという成果は、在校生やその保護者に大きな希望となっている。加えて、生活介護事業所や就労継続支援 B 型事業所など、福祉就労した生徒たちも本人や保護者の希望の事業所と契約することができ、笑顔で事業所に通えている。こうした成果のおかげで、教職員のモチベーションも上がり、学校全体で普段の授業から「生活に必要な力」と「働く力」を身につけて行こうという機運が更に高まっている。

表 2 赤穂特別支援学校高等部卒業生 過去 3 年間の進路状況

進路先＼卒業年度	平成30年度		平成31年度		令和2年度		総計	
	男	女	男	女	男	女	男	女
就職	1	1	1	1	3	4	5	6
就労移行支援事業所	1	1					1	1
就労継続支援A型事業所		1						1
就労継続支援B型事業所	4	1	1		2	2	7	3
生活介護事業所	1	2	1		2	2	4	4
入所施設			3	2	1		4	2
地域活動支援								
在宅・家事手伝い等								
進学（職業訓練校等）	1						1	
小計	8	6	6	3	8	8	22	17
合計	14		9		16		39	

終わりに

赤穂特別支援学校では、「自分らしく働く、自分らしく生活する、自分らしく生きる」をテーマに「わくワークらいふシステム」を更によりよいものに改良しながら、児童生徒の進路選択・進路実現につながるポジティブな支援をこれからも模索し続けていきたいと考えている。自分以外の他者との関わりの中で、経験や体験を積み重ね、生活に必要な力と働く力を身につけ、更に余暇活動も充実させる。特に、ほめられ、認められる経験を重ね、達成感や自信、意欲の向上につながる支援を学校全体で行い、日本中に広めていきたい。

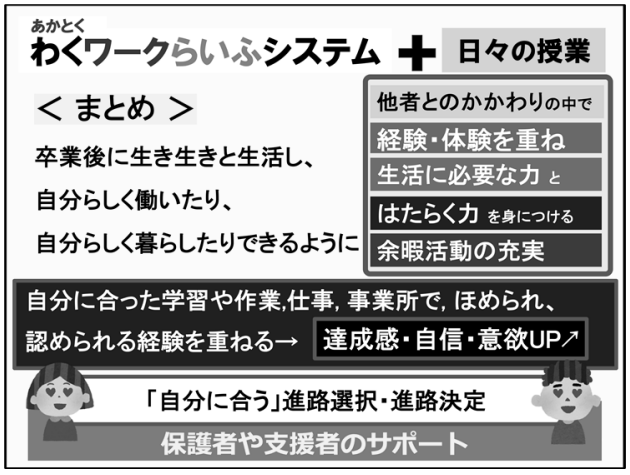

図 7. わくワークらいふシステムのまとめ

（ 執筆者　進路指導部長　西田　裕明 ）